

厚生労働行政推進調査事業費補助金
(政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業))

患者調査等、各種基幹統計調査における NDB データの利用可能性に関する評価
分担研究報告書

「わが国における脂質異常症に対するスタチン処方の実態調査：
NDB サンプルングデータセットによる横断研究」

研究分担者： 大寺祥佑 京都大学医学部附属病院医療情報企画部 特定研究員

研究概要

脂質異常症に対するスタチン処方の実態を調べるために、2011年から2014年までの10月診療分の医科外来レセプトの1%を抽出したNDB サンプルングデータセットを用いて分析を行った。傷病名コードによる脂質異常症患者の同定と、医薬品コードによるスタチン処方の有無を分析し、同定した患者の約50-60%に処方が行われていたことがわかった。高齢であるほど処方割合は低かったが、85歳以上であっても約半数が処方を受けていたことがわかった。今後は縦断的な分析を行うことによって、より精緻な処方実態の把握、および処方とアウトカムの関連を明らかにする必要がある。

A 背景・目的

脂質異常症に対するスタチン処方は国内外で推奨されているが、診療ガイドラインで推奨されている対象年齢層は国によって異なっている。わが国は世界で類をみない高齢社会をむかえており、高齢者に対してスタチンがどのように処方されているか関心が持たれている。しかしその処方実態については未だ不明である。

処方実態の解明には、1) 対象者、すなわち脂質異常症患者、および2) スタチン処方の有無の2点を特定する必要がある。レセプト情報・特定健診等情報データベース(NDB)には全国の保険医療における請求情報が集積されており、上記2点の特定に利用できる。さらに上記1の対象者の特定方法については、本研究班の趣旨であるNDBの患者調査の代替に活かせる可能性が高い。

本研究の目的はNDBを用いて、わが国の脂質異常

症に対するスタチン処方の実態を明らかにすることである。

B 研究方法

本研究では、2011年から2014年の各10月診療分における医科外来レセプトを1%の割合で無作為抽出したNDB サンプルングデータセットを利用した。

脂質異常症患者を特定するため、傷病名マスターのICD10のE78(リポタンパク<蛋白>代謝障害及びその他の脂血症)に該当する傷病名コード(レセプト電算コード)を傷病名(SY)レコードに持つID1を抽出した。またスタチン処方を特定するため、解剖治療化学分類(ATC分類)のC10AA(HMG-CoA還元酵素阻害薬)に該当する医薬品の薬価基準収載医薬品コードに該当する医薬品コード(レセプト電算コード)を医薬品(IY)レコードに持つか否かを調べた。

C 研究結果

2011年の脂質異常症患者は136,613名と同定され、そのうち49.8%にスタチンが処方されていた(表1)。その年以降、処方割合は有意に増加していた(52.4% n=145215, in 2012; 56.6% n=150428, in 2013; 56.7% n=155999, in 2014; p for trend <0.001)。

2014年の処方割合は、女性の方が男性より有意に高く(61.0% vs 50.9%)、年齢階級間(64歳以下、65-74歳、75-84歳、85歳以上)で有意に異なっていた(各々、51.4%, 75.7%, 69.4% and 73.4%, p<0.001)

D 考察

本研究では1ヶ月分の医科外来レセプトを1%の割合で無作為抽出したNDBサンプリングデータセットを用いて、脂質異常症に対するスタチン処方の実態を調べた。傷病コードを用いて脂質異常症患者を同定し、約50-60%にスタチンが処方されていることがわかった。処方割合は年々増加しており、女性の方が男性よりも高く、年齢階級によって異なっていた。

75歳以上の患者に対するスタチン処方の必要性については世界的にも議論の余地があるとされている。本研究の結果、年齢が高いほど処方割合は低くなっている一方で、85歳以上であっても脂質異常症の病名を持つ患者の約半数にスタチンが処方されていたことがわかった。

本研究は横断研究であり、ある一時点の様子を映しているにすぎない。脂質異常症のような慢性的な疾患は数ヶ月ごとの受診や処方が多いと考えられることから、本研究で得た処方割合は実際よりも過小評価されている可能性が高い。

今後は縦断的な分析によって、より精緻な処方実態の把握、および処方とアウトカム(生存率、合併症発生率)の関連を明らかにする必要がある。

E 結論

NDBサンプリングデータセットを用いて、傷病名コードによる脂質異常症患者の同定が可能であった。スタチンの処方割合は約半数にみられたが、より精緻な実態把握のためには縦断的な解析が必要と考えられた。

F 研究発表

Ohtera S, Sakai M, Iwao T, Neff Y, Takahashi Y, Kato G, Nakayama T. Analysis of statin prescription for dyslipidemia with the nationwide health insurance claims data in Japan: a repeated cross-sectional study. ISPOR 22nd Annual International Meeting Boston, MA, USA, May 23, 2017. (Poster)

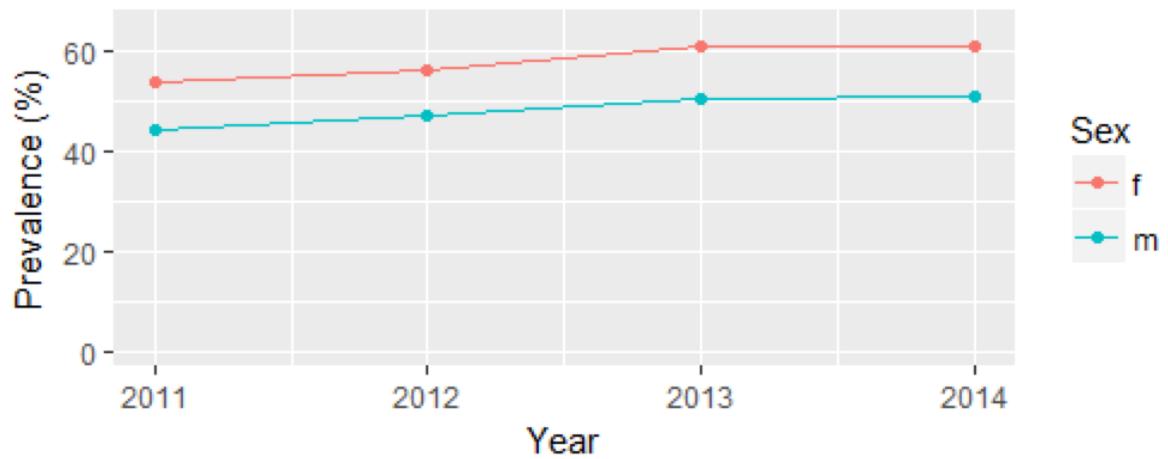
G 知的所有権財産の出願・登録状況

特になし

表 1. 2011 年から 2014 年までの対象患者の特性とスタチン処方割合

	Oct 2011	Oct 2012	Oct 2013	Oct 2014
Total outpatients in 1% sampled data from NDB, N	552 137	568 339	560 554	568 730
Patients with dyslipidemia, N	136 613	145 215	150 428	155 999
Female, N (%)	80 410 (58.9)	85 142 (58.6)	87 587 (58.2)	90 530 (58.0)
Age, N (%)				
-64	50 270 (36.8)	51 267 (35.3)	50 938 (33.9)	50 056 (32.1)
65-74	40 900 (29.9)	44 304 (30.5)	47 112 (31.3)	50 630 (32.5)
75-84	35 227 (25.8)	38 098 (26.2)	39 580 (26.3)	41 169 (26.4)
85+	10 216 (7.5)	11 546 (8.0)	12 798 (8.5)	14 144 (9.1)
Patients prescribed statin, N (%)	68 062 (49.8)	76 116 (52.4)	85 097 (56.6)	88 496 (56.7)

a.



b.

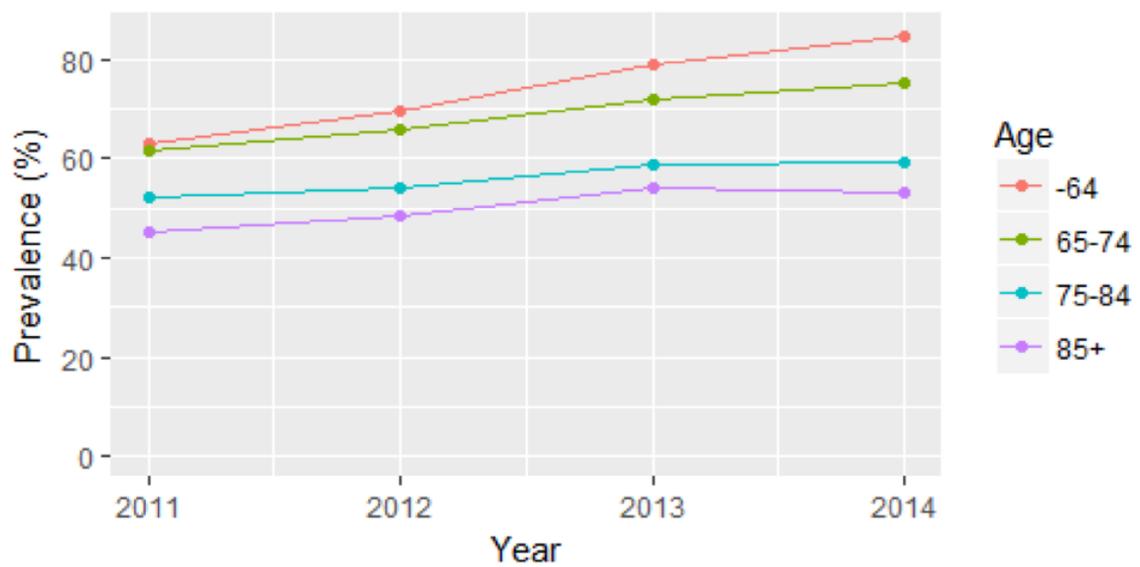


図1. スタチン処方率の経年変化

a. 男女別 b. 年齢階級別